
The Wilds Star

hiro2001

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The Wilds Star

【Nコード】

N4693C

【作者名】

hiro2001

【あらすじ】

一体俺は何をしているのだろう。何故こんな所にいるのだろう…
…日本から遠く離れたアラビア世界の大地に佇む僕は、限りなく非日常的で、でも限りなく人間的な時を刻み続ける。怠惰な日常生活に不意に紛れ込んだ濃紺の財布から、この二ヶ月は始まった。夏から秋へと季節が移りゆくなかで、「デザート・ムーン」によって宿命的に結ばれた、僕と三人の女性が織り成す、それぞれの自分探しの物語です。

プロローグ

一体俺は何をしているのだろう。何故こんな所にいるのだろう……頭の中で繰り返されるそんな言葉を消化することもできずに、僕はただ一人無限に広がる荒野の真只中を歩いてきた。九月も半ばを過ぎていたが、日本から遠く離れたアラビア世界に広がる荒涼とした大地には、秋の気配など微塵も感じられなかった。いや、この不毛の地に季節などというものは、そもそも初めから存在すらしていないのだ。僕は灼熱の太陽に激しく見守られながら、それでも夢幻かもしれない目的地に向かって懸命に歩いてきた。上半身は衣服をまとうこともできずに、小ぶりなりユックだけを肩に背負いながら何とかここまでやってきたが、乾燥した空気にもかかわらず僕の皮膚からはとめどなく汗がしたり落ち、背中から滲み出た僅かながらの体の水分さえも、容赦なくリュックの繊維に吸い込まれていた。僕は何度も立ち止まりながらペットボトルのミネラルウォーターをすすり、朦朧とする意識に鞭打ちながら歩を進めたが、やがて目の前に立ちはだかった岩山を仰ぎ見た瞬間、必死にすがつていた最後の気力も絶望に変わってしまった。僕は傍らに突き出した岩のかげらの上に座り込み、改めて今ここに在る意味を考えた。ほんの二ヶ月前までは、自分がこんな場所にいることも、またこんな気持ちになることも想像していなかった。気だるい日常がひたすらに繰り返され、自分が生きてることさえ認識できなかった。でも、僕は今ここにいた。あたり一面に人間のかげらもない異界の地の果てで、僕は限りなく非日常的で、でも限りなく人間的な時を刻み続けていた。たとえこの先に捜し求めていたものがなかったとしても、僕はおそらく後悔はしないだろう。何故なら、この二ヶ月があつたからこそ、僕は一人の人間として躍動感のある生き方ができたのだから。たとえ今ここで行く手を阻まれて立ち枯れてしまったとしても、夜になれば、僕のその屍は荒野の頭上に無限に輝く星たちに優

しく包まれるのだから。

確かにこれは夢なのかもしれない。目が覚めれば、僕は日常という名のもとに再びその身を隠すことになるのかもしれない。でも、僕はそれを望んではいなかった。そう、それこそが僕が少なくとも人間であった証なのだから。

「じゃあホリベ、今日はお疲れさま」

「お疲れさま。また来週」

毎日八時間以上拘束されているその建物を背にしながら、僕は同僚と別れて帰り道を歩き始めた。七月も終わりにさしかかり、学生たちは夏休みに入っている頃だったが、社会人四年目になるとういふ僕にとってそれは全くの他人事だった。午後七時を目前にしてもなお頭上には星影も見えず、遠く西の彼方からの淡い光によって、周囲はまだほのかな明るさを保っていた。僕は、体にねじ込まれるような真夏の暑さにうんざりしながらネクタイを緩め、金曜日の舗道を足元に踏みしめていたが、本当にうんざりしていたのは暑さのせいではなかった。二十六歳を迎えた僕は今の仕事にも十分に慣れ、社会人としての生活にも適応できるようになってはいたが、それは反対に自分の人生に対する積極的な姿勢を失いかけていた。それは本来人間に本能的に備わっていたはずだったが、繰り返される日常的な毎日に墮落を深め、僕の間人としての価値はもはやゼロに等しかった。もちろんそんな事実から脱出するために何度となく試行錯誤を繰り返したが、それは必ずといっていいほど水泡に帰した。そう、僕はそのようにして一介の公務員に過ぎなかったのだ。でも僕は、完全には諦めていなかった。いつか人間らしくなれるその日まで、たとえ這い蹲ってでも生き続けなければいけないのだ。そして僕の執念の産物は、目の前に落とされていた小さな物体によって、全く別の形で示されようとしていた。

それは誰かの財布だった。僕は無造作に置かれていた濃紺のそれを手に取ると、反射的に中身を調べて確認したが、そこには期待をしたようなものは存在していなかった。僅かばかりの小銭と、誰かの無愛想な写真が貼られた運転免許証だけしかなかった。心臓の鼓動が高鳴りそうな札束もなければ、クレジットカードの類さえ一枚

もなかった。僕は、そんな週末の夜には抱きたくないやるせなさとも、ぼんやりと免許証の写真を眺めた。そこには取り立てて美人でもなく、ましてや僕の好みですらない二十歳の女が、気だるそうな視線をこちらに向けながら佇んでいた。辛うじて、若さだけがこちらに伝わってきたが、彼女はそれさえも表現したくはなさそうだった。僕はそのまま財布を放り投げてしまおうかとも思ったが、心の片隅にほのかに芽生えた好奇心によって、それはスーツのポケットにすっぽりと納まった。金曜日の夜、これから特にすることのなかった僕にとって、彼女の家を探し出して財布を届けるという作業は、まさに絶好の暇つぶしだったからだ。

僕はそのまま足早に駅に向かい、自分の降りるべき駅まで三十分ほど電車に揺られた。車内には、憂鬱な表情を浮かべた人たちが、それぞれの時間を無駄に過ごしていた。そして、これから夜の街に繰り出すにしろ、家族との温かい時間を過ごすにしろ、それはどう考えても有意義な時間の過ごし方ではないように思えた。でも、この中でこれから奇妙な行動をとろうとしている僕は、世界で最も無駄に時間を過ごしていることもまた十分にわかっていた。

駅に着くと、僕はいつもとは違う改札口から出て、自分の家とは反対の方向に歩き出した。免許証の住所から、自分と同じこの東京郊外の町の、しかも同じ駅の近くに住んでいることがわかったので僕は奇妙な戸惑いを感じながら、同じ町とはいえ滅多に通ることのない道を新鮮な気持ちで歩いた。あたりは既に暗闇に包まれていたが、駅から南へと向かう大通りは煌々とした光に包まれていて、彼女の住むアパートを探し出すことは想像よりも容易に運んだ。僕は、電柱に書かれている町の名や道路の標識を頼りに、十分ほどでそのアパートを目の前にした。それは二階建ての小ぢんまりとした造りで、夜の闇の中では壁の薄い青色が目立たずに白く見えた。僕は、階下のポストから彼女が二階に住んでいることを確かめると、すぐそばにあった階段をゆっくりと上り、彼女の名字と同じ文字が書かれた扉の前に立った。一体俺は何をしているのだろう。何故こんな

所にいるのだろう……でも僕は、溢れ出る好奇心を抑えることができずに、扉の横にあったブザーを強く押した。自分が後戻りのできない道を歩き始めたことも知らずに。

扉の向こうからは何も聞こえなかった。かすかな物音さえしなかった。僕は、しばらく迷ってからも一度ブザーを押した。立て続けに三回押したところで、目に見えない向こうで何かが動く音が聞こえ、やがてそれは人間の足音となってこちらに近づいてきた。僕は、扉が自分の体に当たらないように間合いを取ると、次の瞬間写真で見えたことのないその姿をはっきりと目の当たりにした。

「……誰？」

そう呟いて気だるそうな表情を浮かべながら髪に手をやる彼女は、明らかに写真とは違っていた。いや正確に言うと、同一人物であることは確かだったが、その姿は写真以上に凄まじいものだった。髪の毛は各々が勝手に伸びたいほうを向き、化粧をしていない顔に精気は全く感じられなかった。また、グレーのＴシャツにカーキ色のショートパンツといった地味さが、特徴らしい特徴のない目鼻立ちと相まってその存在を見事に薄めていた。僕は自分が今ここにいることを激しく後悔したが、それも十分すぎるほどに遅すぎるものだった。

「ハセベ サトミさん、ですよね？」

「そうだけど……誰？」

「ホリベといますが、財布を届けにきたんです。あなたが道端に落とした財布を。夜も遅いことは十分にわかっていたんですが、困っているだろうと思って」

僕は辛うじて事務的に用件を伝えると、スーツのポケットから紺色の財布を取り出して彼女の前に差し出した。

「確かに私のだけど、どうして？」

「えっ？」

「どうして、わざわざ私の家まで来たの？」

「私の家がこの近くのので、警察に届けるよりも直接届けたほうが

早いかと思ったので」

「ふうん、まあいいわ。わざわざどうもありがとう、ストーカーさん」

彼女は気のない口調で平板に言い放つと、そのまま扉を閉めて部屋に戻っていった。でも、残された僕は事の意外な成り行きに呆然とし、しばらくその場を離れることができなかった。確かに、落ちていた財布を直接持ち主に届けたことは突飛かもしれないが、かといってストーカー呼ばわりされる謂れもなかった。細かい部分での非常識さは別にしても、少なくとも僕は、常識的に考えて悪いことはしていないはずだった。

僕はあまりの理不尽さに慄然としながら、やり場のない怒りを抑えようと懸命に歩き出したが、このまま一人暮らしの自分のアパートに帰ることに躊躇いを感じ、携帯電話を取り出して数時間前に別れたばかりの同僚の番号を指でなぞった。

「ああ、ホリベか。何か用か？」

「なあウチノ、お前今暇か？」

「ああ、まあな」

「急かもしれないけど、これから飲みに行かないか？」

「いいけど、何かあったのか？」

「まあな、後で話すよ」

僕は、そうして隣町に住んでいたウチノを呼び出すと、駅の近くの居酒屋で肩を並べてビールを飲んだ。

「悪かったな。急に呼び出したりして」

「いいよ、ちょうど俺も飲みたかったから。それで、何かあったのか？」

そう問いかけて心配そうな表情を浮かべるウチノに、僕は会社で別れてから今までのことを話した。そんな風に改めて冷静に話してみると、たいしたことでもないように思えたが、ウチノはそれでも真剣な眼差しで話を聞いてくれた。

「そりゃあ、お前も災難だったな」

「暇にまかせてそんなことをした俺も悪いんだけどな」

「まあ、その女のことはともかく、お前そんなに暇なのか？」

「やらなきゃいけないことは山のようにあるんだろうけど、何をやるべきなのかがよくわからなくてさ」

「そんなに難く考えなくてもいいんじゃないか。試しに、こころで結婚でもしてみりゃいいじゃないか」

「そう簡単に言うなよ」

「相手はいないのか？」

「まあな」

「そうか。まあ、ゆっくり考えればいいさ。そうだ、俺と海外に行ってみないか？」

「海外ってどこだよ」

「中近東、イスラム世界さ」

「何でまたそんな所に行くんだよ」

「いやさ、俺の彼女がそつちのほう大好きでさ、一緒に行くことになっていただけけど、急に仕事で行けなくなって、それでどうしようかと思っていたんだ。キャンセル料も馬鹿にならないしな」

「ってことは、出発は……」

「ズバリ、来週の火曜日」

「おいおい、いくらなんでも急すぎるよ。仕事だってあるし」

「仕事なんかいいじゃないか。どうせ休暇が余っているんだろ？」

お前は真面目で休まないからな。まあ中近東って言ったって、怖いことなんか何も無いんだ。ツアーだし、日本人の添乗員もつくしな。二週間だけど、お前は一人もんだからどうにでもなるだろうし、思い切って行こうぜ」

ウチノから目を輝かせてそう誘われると、僕にはもはや否定する材料はなかった。確かに突飛な話ではあったが、しばらくの間非日常的な空間で時を過ごすのも悪くないような気がしていた。すっぴんかそんな風になつてビールを口にするウチノの横顔を見ながら、僕はそんな風に潜在的に感じていた日常からのささやかな脱皮を試みよう

うとしいた。

週が改まった月曜日、僕は朝一番で会社の上司に二週間の休暇を申し出た。普段からきちんとした仕事はしていたし、現実問題としてほとんど休暇を使っていなかったこともあって、係長は快く承諾してくれた。僕は軽く礼をした後自分の席に戻り、周りの同僚たちにその旨を告げた。案の定、普段は休まない僕が長期の休暇を取ることには皆驚き、どこに行つて何をするのかをしきりに聞いたがつたが、僕はしばらく旅行に行くこと以外、誰とどこに行くのかは言わなかった。突然に、しかも中近東に行くなどと言えば、皆何を言うかわからないし、何より変な噂を立てられるのが嫌だったからだ。

その夜、僕はあらかじめ週末に用意しておいたスーツケースを横に置き、ウチノから貰ったツアーのガイドブックを眺めた。イスラエルを除く中近東三ヶ国の遺跡を巡るその内容は、必ずしも僕の興味をそそるものではなかったが、テレビのニュースでしか耳にしたことのない地名の数々を見ると、改めて自分がとんでもない場所に行くことがわかり一抹の不安が過ぎつた。海外旅行には何度か行ったが、日本の裏側に位置するようなイスラム世界は到底思いの外であり、僕はウチノの誘いを受け入れたことを少し後悔した。でも、いずれにしても明日はやってくる。明日になれば、僕は遠きアラビアの地へと旅立つことになるのだ。

次の日の早朝、駅前で待ち合わせた僕とウチノは、成田空港へ向かうシャトルバスに乗り込んだ。車内はほぼ満席で、僕はここに至つて今が夏休み真只中であることを思い出したが、同時にこの中で中近東に向かうのは自分たちだけだろうとも思っていた。仕事で否応なく行くしかない商社勤めのサラリーマン以外に、進んで行くような人がいるとはとても思えなかったからだ。

でも、成田空港のツアーの集合場所で、実際に十人程度の人たちが皆思い思いに佇んでいるのを目の当たりにして、僕は現実的に少

なからず驚いた。それは二十代のカップル風であり、あるいは年配の男女の集団だった。

「へえ、こんなツアーに参加する人もいるんだな」

「そうそう、世の中にはいろいろな人たちがいるんだぜ。アフリカやアマゾンの密林を探検するツアーだってあるんだから。結構評判がいいらしいぜ」

そう言うてにやけた笑みを浮かべるウチノの横顔を見ながら、僕は人の好みの多様性を改めて感じ、日本が平和であることをつくづく思い知った。

やがて集合の合図がかかり、僕らを含めた十数名の一行は日本を後にした。でも、当然のことながら現地への直行便はなく、クアラルンプールとバンコクで飛行機を乗り継ぎ、実に二十時間以上をかけてヨルダンの首都アンマンの国際空港に降り立った。

「……すげえな」

搭乗口を出てタラップを降りようとした僕は、そのあたり一面に広がるくすんだ茶色の世界に無意味なほどの感動を覚えていた。テレビ番組では見ていたが、実際に目の当たりにするとそれは明らかに空想的だった。自分が本当に中近東に来ている実感がいまひとつ湧かなかった。どこかの映画のセットのようでもあったが、それにしては空気の質が違っていた。

僕らはひとまず入国審査を済ませると、そのままバスに乗り込んで繁華街にあるホテルにチェックインした。

「ああ、疲れたな」

「ほとんど丸一日飛行機に乗っていたようなものだからな」

「でも驚いたぜ。これが中近東、イスラムの国なんだな。まだ実感が湧かないけど」

「俺もだよ。まあ、明日からいろいろと見て回ればわかるんだろうけどな」

疲労の色を隠さずに眠そうに言うウチノに笑顔で頷いた僕は、明日から目にするであろう異世界の光景に奇妙なほどの胸の高鳴りを

覚えていた。

次の日、僕らはホテルからバスで南に移動し、ハリウッド映画の撮影にも使われた有名な遺跡を見物した。もともと、それは生半可なものではなく、その遺跡に辿り着くまでには、峡谷のように両側が鋭く競りあがった中を通じる細い道を一時間歩き、それから緩やかにうねりを見せる荒野の真ん中を二時間歩き、さらには足が竦みそうに切り立った崖の上へばりついた山道を一時間歩かなければならなかった。僕らは途中で休憩や昼食を挟みながら、刺すように照り付ける中近東の太陽を背にしてひたすらに歩いた。汗はとめどなく地面にしたたり落ち、ミネラルウォーターで取り込んだ水もすぐに体から蒸発していった。一体俺は何をしているのだろう。何故こんな所にいるのだろう……でも、僕らはそれでも歩き続け、やがて何とか目的地の遺跡に辿り着いた。

「いやあ、やっと着いたな」

「今までの人生の中で一番しんどかったぜ」

大袈裟に言い放つウチノの姿の向こうに、でも僕は見覚えのある何かが見界の中にあることに気づいた。朦朧とした意識のせいで、初めのうちは何なのかがよくわからなかったが、次第にそれは僕の記憶の底にあった何かと一致してきた。そう、それは幻ではなく現実だったのだ。僕が今ここにいることも、そして目の前に広がっている光景も。

ウチノの向こうにいたのはハセベ サトミだった。何日か前に見た免許証の写真とも、ましてアパートで見た姿とも違っていたが、それはまぎれもなく彼女だった。真っ白だったであろうTシャツは汗色に変化し、カーキ色のショートパンツと絶妙のコンビネーションだったが、迷彩色のキャップを被って真っ黒に日焼けした彼女は、一心不乱に絵を描いていた。目の前の切り立った崖に掘られた古の神殿の彫刻物を、脇目も振らずに真っ白なキャンバスに復元してい

た。僕は声をかけようかどうか躊躇したが、ストーカー呼びわりされたことが頭をかすめ、結局はそのまま見過ごすことにした。

そして見物時間も終わり、僕らが来た道を引き返そうと彼女の真横を横切った瞬間、その気だるい声があからさまに僕を呼び止めた。

「シカトする気なの？ ストーカーさん」

「えっ？」

「さっきから、私のことわかってるくせしてシカトしてたでしょ？」

そう言い放っていたはずらっぱい笑みを浮かべる彼女を見て、僕は周りの反応を気にすることなく、抑えていた想いを解き放った。

「人をストーカー呼びわりするな。せつかく人が親切で財布を届けてやったのに」

でも、彼女は聞いていなかった。その耳にはウォークマンのイヤホンがはめられていたからだ。僕は何だか急に馬鹿馬鹿しくなり、彼女の耳からそれを抜き取ると、怒鳴るのを諦めて静かに告げた。

「もういいよ。親切にしてくれた俺が馬鹿だった。ストーカーにでも何にでも勝手にしてくれ。でも、俺にはもう構うな」

彼女はしばらくの間黙っていた。笑うでもなく怒るでもなく、ただ平板な眼差しで僕を見ていた。

「ちよつと、この歌聴いてみる？」

突然発せられたその一言に、僕は彼女の意図が全くわからなかったが、何もかもを考えるのをやめて差し出されたイヤホンを自分の耳にあてた。

「この曲は……」

「私、この曲大好きなの」

それは、デニス・デ・ヤングの「デザート・ムーン」だった。かなり昔の曲だったので、僕は二十歳の彼女がそれを知っていることに驚いたが、そんな想いを見透かしたのか、彼女は初めての優しい声を僕に投げかけた。

「姉さんがよく聴いてたのよ」

「俺もよく聞いたよ。確かにいい曲だよな」

「感謝してるのよ、財布のこと……。ありがとう」

彼女は、その不釣合いな言葉を僕に向けると、再びキャンバスのもとに戻っていった。僕は思いがけないその一言に面食らったが、悪い気がするわけもなくそのまま彼女の後ろ姿を見つめた。そこに何らかの感情があるわけではなかったが、僕は純粹にその一言を噛み締めていたのだ。

それからもツアーは続いたが、僕は彼女との偶然の再会にかすかに心が揺らいでいた。最後の日の夜に、シリアの荒野の真ん中でこぼれ落ちそうな星たちを目の当たりにした時も、僕は彼女のことを、その最後の一言を感じていた。そう、僕は彼女のことを気になつていたので。そして、彼女と一度ゆっくりと話がしたい僅かな欲求を胸に抱いていた。

それは、二週間の中近東ツアーから戻ってきた週の土曜日だった。僕はちよつとした買い物をするために、新宿東口のスクランブル交差点に佇んでいた。その日も朝からうだるような暑さで、僕は滲み出る額の汗にうんざりしながら信号が青になるのを待っていた。そんな折、僕は交差点の向こう側に見覚えのある姿があることに気づいた。人違いのようにも思えたが、その姿は確かに僕の記憶に根付いていた。そして気がつく、僕は信号が青になるのを待ちきれずに正面の人影に手を振っていた。

「おい、チサト!」

その瞬間信号が青になり、僕らはそうして交差点の真ん中で四年ぶりに再会した。

「……ユウト? 本当にユウトなの?」

「久しぶりだな」

そう言っつてつくづくと見るチサトは、かつてのままにそこに立っていた。流れるようにストレートな黒髪は肩を越えて長く伸び、大きめの丸い瞳の奥には澄み切った泉が横たわっていた。そして、薄いブルーのノースリーブとアイボリーのパンツに包まれてはにかんだ笑顔を見せる姿は、何もかもが昔と変わっていなかった。そう、大学時代の同級生だった僕らは、あの時確かに付き合っていたのだ。もう遠い昔のことのようにも思えたが、今現実にチサトを目の当たりにすると、それはほんの少し前のことのように感じた。

「あっ、信号が赤になってる」

チサトの叫び声に我に返った僕は、反射的に彼女の手を取って、車のクラクションに冷やかされながら舗道へと走った。チサトの手はあの時と同じ温もりをたたえていて、それが僕の手懐かしい想いとなって伝わってきた。頭の中がタイムスリップをしたようになり、僕はその気持ちのままにチサトをお茶に誘った。チサトには待

ち合わせの予定があつたが、時間までならという条件で、僕は待ち合わせ場所の喫茶店に入った。

「悪いな。待ち合わせがあるのに急に誘っちゃって」

「いいのよ。まだ時間まで少しあるし、久しぶりに会つたんだもの」

「そうだよな。あれからもう四年が経つんだよな」

「大学を卒業して以来だものね。ところで随分日に焼けてるけど、どこかに行ったの？」

「ああ、ちよつと旅行に行つてたんだ」

「そうよね。もう夏だものね」

店員が注文を聞きにきたので、僕はアイスコーヒーを二つ頼んだ。チサトは自分が夏と言つたことを確かめるように、窓の外にある眩しい光景を眺めた。

「あの時は、ごめんな」

「えっ？」

「四年前のこと」

「もう昔のことじゃない」

「そうだけど……ところで、チサトは今何してるんだ？」

「普通のOLよ。小さな会社だけどね。ユウトは？」

「しがない会社員さ」

「小説、まだ書いてるの？」

「いや、才能ないみたいだから」

「そう、ユウトの書く物語、好きだったんだけどな」

「俺のことは？」

「えっ？」

「今さらかもしれないけど、俺たちもう、昔のようには戻れないのかな？」

僕の言葉に、チサトはこちらに視線を向けたまま黙っていた。そう、僕は今明らかに思い出していたのだ。自分が作家になろうとしていたことを、そしてチサトを好きだったことを。

「だって、私から別れたわけじゃないのよ。あの時は……」

でも、チサトの声は途中で無造作に途切れた。それは彼女が視線の向こうに自分の待ち人を見つけたからだった。そして、僕がその人物を見ようと振り返った瞬間、あまりに意外な光景に思わず息を呑んだ。何故ならそれは、本当にありえない出来事だったからだ。

「あっサトミ、こっちよ」

「サトミって……知ってるのか？」

「知ってるも何もないわよ。妹だもの」

チサトの答えに、僕は近づいてくるサトミを見ながら、混乱する頭の中を必死に整理しようとした。確かに今思えば、チサトの名字もハセベだったし、妹がいることも知ってはいたが、そうは言ってもチサトとサトミを結びつけることは到底できなかった。その違和感は、モンブランの上にイチゴをのせるようなものだったからだ。

「あれっ、ストーカーさんが何でここにいるの？」

でも、必要以上に日焼けをしていたサトミの一言で、僕の頭は唐突にその思考を停止した。

「だから、もうストーカーはやめてくれよ」

「何、二人知り合いだったの？ ストーカーって何のこと？」

あつけにとられた表情で純粹に尋ねてくるチサトに、僕は二人の姉妹を座らせてから、ゆつくりと順を追って説明した。

「そう、そんなことがあったの。でも、ユウトをストーカー呼ばわりするのはよくないわよ。ちゃんと謝りなさい」

「謝ったわよ。ヨルダンで」

「あれで謝ってるって言えるのか？」

「そんなことより、姉さんとこの人がどうして一緒にいるの？」

僕の言葉が無視するかのように、サトミはチサトに問いかけた。でも、チサトが言いにくそうな顔つきでこちらを見たので、僕がその代わりに答えた。

「俺とチサトは、大学の時に付き合ってたんだ」

「へえ、じゃあもう長いんだ」

「……卒業する前に別れたのよ」

思い切って呟いたのであろうチサトの言葉には、さすがのサトミも押し黙った。三人の間にはエアコンで冷たくなった空気だけが流れていて、僕の居心地は確実に悪かった。隣の席で話している二人連れの会話が妙に生々しく耳に入ってきた。

「そう言えば、姉さんあの頃よく言ってたわね。サトミもいい恋愛をしなさいって」

「もう、今さら変なこと言うんじゃないの」

チサトはそう言うと言わなくさそうにうつむいたが、サトミの言葉がその場の空気を変えたことは明らかだった。僕ら三人は再び言葉のキャッチボールを始めた。

「それで、サトミちゃんは二十歳だから、学生かな？」

「サトミでいいわよ。気持ち悪いから。美大で絵の勉強してるの。でも、どうして私の歳を知ってるの？ やっぱりストーリーカーじゃない」

「免許証に書いてあったんだよ。お前……いや、サトミが落とした財布の中にあつた」

「サトミも、いつまでも失礼よ」

「ごめんなさい。姉さんから見れば元彼だもんね」

チサトの窘めにも、サトミは動じることなく平然と言い放った。

でも、僕はサトミに対して以前のような不快感を持たなかった。チサトの妹とわかったこともあつたが、僕の中に別の感情が芽生え始めたからだ。でもそれは、一人の女に対するものではなく、珍しい動物を眺めるような気持ちだった。少なくともこれまでの人生の中で、サトミのような女と触れ合ったことがなかったからだ。

やがて二人の姉妹とは別れたが、僕が席を立とうとした瞬間に、チサトが僕のズボンのポケットに小さな紙切れを差し入れた。店を出た後でそれを取り出して見ると、そこにはまた会いたい旨の走り書きと携帯電話の番号が記されていた。僕はその番号を穴が開くほどに見つめながら、あの頃の自分たちに、そしてチサトの笑顔に思いを馳せ、どうしようもなく高まる想いを抑えることができずに、

その日の夜に電話をかけ、水曜日の夜に会う約束をした。

その日は朝から珍しく雨が降ったが、次第にその勢いは衰え、夜になる頃には舗道の水溜りだけを残して立ち去った。僕らはお互いに会社が終わってから待ち合わせ、昔よく行った、大学の近くのイタメシ屋で夕食をとった。二人の年齢以外には何もかもが昔のままのように思え、僕らはそうしてあの頃の気分には酔いしれた。だから、夕食後の映画を見終わって、橋の上から皇居のお堀を眺める頃には、既に全てがセピア色の思い出から解き放たれていた。

「何も変わってないね。風の匂いも、このお堀も」

「そしてチサトも」

僕の言葉にチサトは一瞬こちらを向いたが、またすぐに目を外して遠くを見つめた。そして、高鳴る想いに耐え切れなくなった僕は、自分の心の扉をチサトに向けて素直に開放した。

「俺たち、もう一度やり直そう。俺、やっぱりチサトのことが好きだよ」

チサトは何も言わなかった。ただ目に涙を溜めて僕のほうをじっと見ていた。僕はその涙がこぼれ落ちる前にチサトを抱き寄せた。

「……嬉しいわ」

チサトの呟きが僕の心臓の鼓動と相まって強く響き、それから僕らはお互いの唇を激しく求め合った。その味が、あの頃と同じであることを確かめながら。

僕らはそうして再び付き合い始めたが、そこには一つだけ厄介な問題があった。それは全く僕の個人的なことだったが、容易に片付けるにはかなり難しいことだった。

それは翌週の火曜日だった。僕は仕事を終わると、駅から電車を乗り継いで池袋へ向かった。そして、毎週そうするように駅近くの喫茶店に入ってコーヒートを注文した。そこは大通りから一本裏に入

った路地にある小さな店で、僕は静かに流れるオールデイズの音楽を聴きながら、時間をかけて自分の心を日常生活から解放していた。

「待った？」

「いや、今来たところ」

「私も、コーヒー貰おうかな」

僕は、彼女のその言葉に促されるようにコーヒーを追加し、それから一週間に一度しかない貴重なひと時に身を委ねた。彼女の名はミサトといい、二十九歳で同じ会社に勤めていた。実年齢は上だったが、見た目の雰囲気や物の考え方はむしろ僕より年下のように思えた。ハニーブラウンの髪は肩につかず短くまとまり、小ぶりな顔には人なつこそうな柔らかい視線を放つ目と、常にピンクに潤んでいる唇がほどよく収まっていた。目元や首筋の細かい部分に目を向けなければ、二十歳といっても通用する顔立ちだった。

「『デザート・ムーン』がかかっているね。何度聴いてもいい曲よね」
「今日は家のほう大丈夫なの？」

「うん、旦那は仕事で遅くなるし、子供は実家に預けてきたから」
ミサトは何気なくそう言うと、運ばれてきたコーヒーを口に含み、それから白いシャツの襟を少し直した。短めのチェックのスカートとの取り合わせは、どう考えても女子高生の制服のようだったが、ミサトはそんなことなど気にもとめていない様子だった。

「さてと、出ましようか？」

ミサトに促されて僕らはその店を後にすると、いつものように目に付いたホテルに入りお互いの体を求め合った。そうすることが正しいかどうかなど、僕らは全く考えていなかった。少なくとも僕はミサトを求めていたし、彼女も僕を愛してくれた。でも僕らにはわかっていて、二人の関係が道徳的には間違っていることを、そしていつかそれにも終わりが来ることを。

「実は、ミサトに話したいことがあるんだけど」

「何？」

僕の問いかけに、ミサトはベッドの中で僕の胸から顔を上げてこちらを向いた。その目には、いつもの柔らかな光が浮かんでいた。

「好きな子ができたんだ。だから、俺たちもう会わないほうがいいような気がするんだ」

「会いたくないんじゃないかと、会わないほうがいいと思ってるのね」

ミサトは僕に向かってそう念を押した。その表情からは、既に人なつこさは消え失せていた。

「ああ。そうすべきだと思うんだ」

「ねえ、今さら何を言ってるの？ 私には旦那も子供もいるのよ。でも、あなたに会いたいからこうしてここにいます。そんなことを言い出したら、私なんかとてもあなたに会えないじゃない。私たちはお互いに会いたいから会ってるんじゃないの？ そこに常識や理屈なんてないのよ。あなたに好きな人ができようができませんが、あなた自身が私と会いたくなくなったら自然に別れるだろうし、私もそうするわ。違うかしら？」

ミサトの言うことはもつともだった。ある意味では筋が通っていた。でも僕は、やはりこのままではいけないような気がしていた。

そしてそのことは、最も残酷な事実によって僕の目の前に突きつけられることになった。

その週末、僕はチサトの住む部屋に招待された。午後二時過ぎに駅の改札口を通り抜けると、目の前には薄いピンクのＴシャツにジーンズ姿の、ラフなスタイルのチサトが立っていた。僕らは互いの目で挨拶を交わすと、そのまま並んで駅前のロータリーを横切って通りを北に向かった。そこは東京の郊外にある小さな町で、僕の住む町からは電車で二十分程度だった。一日で最も太陽が激しく輝く時間だったが、それでも僕らは腕を絡ませて寄り添うように歩いた。十分ほど歩くと額や腋の下に汗が滲んできたが、その暑さに体が蝕まれる前に、駅前通りから狭い路地に入った所にそのアパートは見つかった。造りたてで真っ白なその建物は、僕にケーキの生クリームを連想させた。チサトの部屋は一階の角にあり、彼女がキーを取り出して扉を開けると、目の前にはワンルームの眩しい空間が広がった。部屋全体は淡色系の色でまとめられ、必要最低限の家具や電気製品が手際よく収まっていた。掃除の行き届いた空間を通してベランダに出てみると、そこには麗かな郊外の風景と、彼方に山々の連なりが見渡せた。全体的に見て、すっきりとした気持ちのいい雰囲気だった。

「いい部屋だな。さすがはチサト、きちんと暮らしてる」

「あまりうるさいのって好きじゃないのよ。年を取ったせいかもしれないけど」

チサトははにかんだ笑顔を浮かべてそう言うと、さっそくキッチンに立って昼食の用意を始めた。

「ちょっと遅くなっちゃったけど、もう準備はできてるから、そこに座って待ってて。あと、冷蔵庫にワインが冷えてるから先に飲んで」

「一緒に飲もうよ。待ってるから」

僕は冷蔵庫からワインを取り出すと、チサトにグラスの存在を確

かめてからダイニングテーブルに持ってきた。そうして椅子に座って改めてチサトを見てみると、この状況が新婚家庭のように思えてきて、僕は何だか無性に可笑しくなった。のどかな週末の昼下がり、雰囲気の良い部屋で二人でワイン……それはまさに、典型的なテレビコマーシャルのようだった。

「さあ、できたわよ」

チサトの声に促されるかのように、僕はテーブルに示された鮭とイクラのスープパスタを眺めた。

「相変わらず料理うまいな」

「お世辞を言っても何も出ないわよ。さあ、乾杯しましょう」

僕はワインボトルのコルク栓を勢いよく引き抜くと、二人のグラスに半分ずつ注いだ。

「じゃあ、乾杯だ」

「何に対して？」

「のどかな週末の昼下がりに」

「ふふ、相変わらずね」

グラスの触れ合う澄んだ音が響き、僕らはそうして二人だけの時間を共有した。よく冷えた白ワインはすっきりとした味わいで、クリム仕立てのパスタと見事にマッチしていた。

でも、そんなドラマのワンシーンのような場面も長くは続かなかった。僕らがパスタを食べ終えて、ワインを手にながら取りとめない話をしていると、突然降って湧いたかのように玄関のチャイムが鳴った。

「誰かしら？」

不思議がるチサトが確かめようと席を外すと、しばらくしてから驚いた表情でこちらに戻ってきた。

「姉さんが……来たの」

確かに、チサトの背後には人影が見えた。最初は影になって顔が見えなかったが、部屋に差し込まれた太陽の光が照らし出すに至って、僕は開いた口が塞がらずにその人物に釘づけになってしまった。

そこに立っていたのは、まぎれもなくミサトだった。ミサトはこちらを見るやいなや血の気が引いたように真っ青になり、二人はそうして見つめ合ったまま無言の時間を過ごした。

「二人ともどうしたの？」

チサトの声によろやく自分を取り戻した僕は、ミサトへの挨拶もそこそこに彼女を隣に座らせた。ミサトは会社で見るよりも幾分老けて見えたが、その理由はすぐにわかった。それは、普段僕が見ることのない週末の主婦の姿だったからだ。

「でも姉さん、急にどうしたの？」

「この近くに用があったから、ついでに来てみたのよ。ほら、最近会ってなかったから」

「じゃあ、そろそろ俺、帰ろうか？」

どうにも居心地が悪くなった僕がそう切り出すと、チサトはそれを柔らかに静止し、ちよとよかつたと言ってミサトに僕のことを話し始めた。僕は生きた心地がせずに、目の前にあった空のワイングラスをじっと見ていた。そして、自分がこのグラスだったらどんなに気が楽だろうと思った。

「そう、偶然ってやつぱりあるのね。でもよかつたじゃない。ホリベさんも、チサトをよろしくね。姉の私が言うのも変だけど、この子本当にいい子だから」

よそ行きの笑顔を浮かべながらそう言うミサトに、僕はその本心を想像すると胸が痛んだ。でも、ミサトはそんな素振りを微塵も見せなかった。彼女は確かに、本当の大人の女だった。

「そうだ、せつかく気分のいい昼下がりなんだから、音楽でも聴かない？」

複雑に交錯する僕の気持ちをもよほに、チサトは近くにあったCDデッキのスイッチを入れた。

「これは……」

「デニス・デ・ヤングの『デザート・ムーン』よ。姉さん、好きだったわよね」

チサトの言葉に、僕ははつきりと思い出していた。前にヨルダンでサトミが言っていたことを、そしてこの間喫茶店でミサトが言っていた一言を……。そう、全てはこの曲にあったのだ。この曲こそが、三人の姉妹を結ぶキーになっていたのだ。僕はその事実を必死に受け止めながら、でもこれからどうすればいいのかがわからずに途方に暮れた。遠くからかすかに聞こえる蝉の声すら、僕の救いにはならなかった。

やがてミサトが家に帰ると言ったので、僕もそれに呼応するように席を立った。チサトは僕が帰ることに残念そうな表情を浮かべたが、僕は何よりも今日明らかになった事実についてミサトと話したかったので、彼女を追うようにチサトの住むアパートを後にした。「驚いたよ。まさか、ミサトとチサトが姉妹だったなんて。まあ、言われてみれば名前もよく似てるけど」

「私もよ。偶然と言ってしまえばそれまでだけど、未だに信じられない」

二人は西の空がほのかにオレンジ色に染まる中を、駅に向かって並んで舗道を踏みしめていた。夕方とはいえ未だ暑さは衰えていなかったが、それでも駅前通りは買い物客で賑わっていた。僕らが並んで歩く間にはほんの僅かな隙間があつたが、今の僕にはとつともなく険しくて深い谷が横たわっているように思え、偶然と運命のいたずらに弄ばれている自分を痛切に感じていた。

「やっぱり、やめたほうがいいよな」

「えっ？」

「俺たち二人のこと」

ミサトは、僕の言葉にも全く反応しなかった。ただ、その眼差しを真正面に据えて歩いていった。彼女が自分の頭の中で真実に思いを巡らせながら、必死にそれと格闘しているのだろうと思つた僕は、もうそれ以上の言葉を出さなかった。僕自身も、これからの二人をどうすればいいのかわからなかった。ミサトとチサトが姉妹であるとわかつた以上、いやミサトとの関係それ自体も含めて、道徳的に間違っていることは十分にわかつていた。だから、少なくともその真実を踏まえてミサトと別れることは当然だった。でも、僕はミサトを愛していた。チサトも愛していたが、それとはまた違う意味でミサトを求めていた。

《でも、あなたに会いたいからこうしてここにいます。私たちはお互いに会いたいから会ってるんじゃないの？　そこに常識や理屈なんてないのよ》

ベッドの中のミサトの声が、僕の頭の中を駆け巡った。そう、理不尽ではあったが、僕は自分の気持ちに嘘はつけないのだ。

それからすぐに火曜日がやってきたが、いつもの喫茶店にミサトは現れなかった。デニス・デ・ヤングの「デザート・ムーン」が流れたが、それでも彼女は目の前の椅子に座ってはくれなかった。それを予期していた僕は別段驚かなかったが、次第にその現実押しつぶされそうになり、一時間待ったところで思い切って彼女の携帯に電話をかけた。案の定電話が繋がることはなかったが、僕が待つのを諦めて店を出たところで、一通のメールが携帯の中に運ばれてきた。

『ごめんなさい。やっぱりあなたとはもう会えません。会いたいけど……別れましょう』

それだけの文章を僕は何度も繰り返し読んだ。全ては予期していたことだったが、それでも僕は虚しさに打ちひしがれ、突きつけられた事実には涙を抑えることができなかった。そう、僕とミサトは一年以上も時の流れを彷徨い続け、その立場は違ってもお互いの想いのままに求め合ってきたのだ。そして、事情はどうあれ僕らは、いや少なくとも僕はそれを唐突に終わらせたくなかったのだ。咽ぶような夜の繁華街の暑さは堪えたが、でも頭上に佇む月だけは、そんな僕の気持ちを察して温かい眼差しを投げかけてくれた。

それから週末までの何日かを、僕はミサトとの思い出とともに過ごした。金曜日の夜にはチサトと会ったが、僕は自分の気持ちの混乱を整理することができなかった。いや、そもそも最初から混乱などしていなかった。ミサトとチサトとは、僕自身の愛し方の方向性が違っていたのだ。だから、僕の中で二人への想いは共存できた。でも、ミサトと会えなくなってしまったことで、僕は自分の根

本的な部分を損なってしまったような気がしていた。そしてそれは、チサトをもってしても決して埋められない種類のものだった。

それは日曜日の昼下がりであった。僕は電車を乗り継いで、ウチノの結婚披露宴の会場に向かっていた。ドアの脇に立って見る窓の外は薄っすらと雲に覆われてはいたが、所々から日も差し込み、祝いの日としてはまずまずの天気だった。ウチノの相手は二十歳の美容師で、彼女の仕事の都合で式の前に新婚旅行に行く予定だったが、結局その仕事の都合でフイになり、代わりに僕と一緒に中近東へ行ったのだ。ウチノと彼女とは一年以上の付き合いで、偶然ではあったが僕とミサトが過ごした時間と同じだった。僕はそこで再びミサトのことを思い出したが、窓外を景色が流れ去っていくように、懸命に自分の意識の中から消し去るしかなかった。

開宴の十分前に会場に入ると、既に大方の人が席に着いていたので、僕もあてがわれたテーブルの前に腰を下ろし、ひとしきり周囲を見渡した。その時に視界の中を何かが過ぎったような気がしたが、それを確認する前に宴が始まったので、僕はその思考は宙に浮いたまま消えてしまった。

やがて披露宴も滞りなく終わり、二次会に誘われていた僕は、しばらく同僚たちと話をした後で時間を合わせて一緒に会場に向かった。そして会が始まってしばらく経った頃、料理を取ろうと中央のテーブルに近寄ったところで、真後ろからの聞き覚えのある声に振り返った。

「何でここにいるの?」

そう言っている割には不思議そうな表情も浮かべていないその姿は、間違いなくサトミだった。もっとも黒いシルクドレスを身にまとっていたせいで、それがサトミだとわかるまでに多少の時間がかった。でも、気だるそうな表情や言葉遣いは明らかに彼女のものだった。

「サトミこそ、何でここにいるんだ?」

「新婦の高校時代の友達よ。堅く言えばね。で、そっちは？」

「新郎の会社の同僚だよ。堅く言えばな」

「ふうん。でもよく会うわね、私たち」

「まあな。不思議って言えば不思議だよな」

「やっぱり、ストーカーなんじゃないの？」

「おい、もう一度言ってみるよ」

そうは言ったものの、僕は怒ってはいなかった。確かにサトミは不躰で変わったところも多かったが、少なくとも僕にはそれが斬新だった。だから、普通に考えればどう考えても噛み合わない二人だったにもかかわらず、僕らはそこで結構いろいろな話をした。

やがて二次会もお開きになったが、飲み足りなかった僕はサトミを誘って近くのショットバーに入った。初めての店だったが、日曜日の夜ということもあってか客はほとんどいなかった。僕はカウスターに並んで座り、ウイスキーのロックとサトミのためのギムレットを注文した。

「姉さん、とても真面目でできた女性よ」

「どっちの姉さんのこと？」

「どっちって、チサト姉さんのことだけど」

「三人姉妹だったんだよな。昔チサトから聞いていたような気もするんだけど、忘れてたんだ。でも、この間偶然ミサトさんと会ってさ」

「そうなの。ミサト姉さんもいい女性よ。チサト姉さんとはタイプが違うけど」

「それは何となくわかるよ」

「二人ともできた人よ。私なんかとは大違いで。まあ、本当の姉妹じゃないから仕方ないけど」

「えっ？」

何気なく繰り出されたサトミの言葉に、僕は一瞬自分の耳を疑った。二人の姉とサトミが本当の姉妹ではないとは一体どういうことなのか、徐々に酔いが回ってきた僕の頭の中では皆目見当がつかない

か
っ
た。
。

「私ね、父親の浮気相手の子なの。ほら、よくあるでしょ。会社の上司と部下との不倫って。うちの場合も見事にそういうやつ。もう絵に描いたみたいに二時間ドラマなの。二十年前、私の母親が同じ会社で働いていて、そこで付き合っているうちにできたのが私。後から思ったんだけど、サトミって名前も安易よね。だって上からミサト、チサトってきてサトミよ。ミサトをひっくり返しただけなんだから、父親も本当にいい加減よね。まあそれはいいんだけど、私が五歳の時に母親が死んじゃって、それで父親に引き取られたの。家には、もう一人の母親と二人の姉さんがいて、みんな私によくしてくれたわ。特に、姉さんたちは本当に可愛がってくれた。元々父親が強い家だったって理由もあるんだろうけど。でもね、やっぱり私には居心地が悪かったの。どう見たって結局私だけは他人だしね。だから、中学や高校の時も結構悪いことしたし、とにかく家を出たかったから、大学に入ると同時に一人暮らしを始めたの」

「でも、サトミには絵があっただろう？」

「どんな人間にも、一つくらいは取り柄があるのよね。小さい時から絵だけは好きだったし、学校の先生からも褒められたわ。まあ、好きっていうより習慣だったのかな、絵を描くのが」

「どうして、あんな中近東まで行って描いてるんだ？」

「どうしてなんだろう。自分でもよくわからないんだけど、自分の周りの人物や風景ってどうしても描く気にならないの。もっと非日常的で、でも十分にリアリティーのあるものが描きたいの。そういう意味じゃ、イスラム世界っていいのよね」

「なるほどな」

「ユウトは、小説を書いているんでしょ？ チサト姉さんが言ったけど」

「大学の時はな。作家になりたかったんだ。自分に才能があるかど

うかわからなかったけど、とにかく自分の物語をいろいろな人に読んでもらいたかったんだ。物語を通じて、自分の生き方や考え方を認めてほしかったっていうのもあるけど」

「それで、今も書いてるの？」

「いや」

「それって、もう自分を認めてもらえたらやめたの？」

サトミの問いかけに、僕はうまく返事ができなかった。僕が書かなくなった理由はそんな綺麗事ではなく、単に仕事や日常生活の波にのまれて何となくやめただけだったからだ。才能がないと自分で勝手に決めつけてそれを正当化していただけなのだ。でも、僕には恥ずかしくて言えなかった。決して恵まれているとは言えない運命を辿りながらも、自分を失うことなく直線的に生きているサトミの前では、僕の生き方自体が陳腐なものに見えたからだ。

「まあ、いろいろとあつてな」

「でも、また書き始めるのよね？ 新しいのを書いたら読ませてね」
そう言って、サトミはグラスの底に残った最後のギムレットを愛しそうに飲んだ。僕はその横顔を視野に入れながらも、自分の中途半端な生き方を恥じ、いつから作家になる夢が消えてしまったのか、その瞬間を必死に思い出そうとした。でも、そんなことをしても無駄だった。結局のところ僕は自分の人生を見失い、その結果自分自身をも失っていた。僕はそのことをサトミから教わり、改めて怠惰な日常生活から抜け出そうと決心した。と同時に、見た目や言葉遣いとは異なるサトミの意外な内面を垣間見て、僕は自分の気持ちのかすかな揺れを感じていた。それが、具体的に何を意味するのかはまだわからなかったが、少なくともサトミの存在が僕の人生を別の方向に導こうとしていることだけは明らかだった。

一週間後の土曜日、僕はチサトと二人で、ドライブをしながら横浜の郊外にあるテーマパークに向かった。既に九月になってはいたが、その日の残暑はこのほか厳しく、僕はエアコンを最大にして

車の中の空間だけは避暑地にしようと思死だった。

「いい天気になったわね」

「でも、外は暑そうだな」

「雨が降るよりいいじゃない」

チサトはそう言っていると、窓の外を流れる景色を眩しそうに眺めた。

彼女は薄いベージュのカットソーに濃いベージュのチェックのスカート姿で、色合いでは既にひと足先の秋の装이었다。

「俺さ、もう一度小説書いてみようと思ってるんだ」

「えっ？」

「この間、友達に言われて思ったんだ。このまま終わらせちゃいけないって。才能がないなんて言い訳してやめちゃいけないって」

「本当に……また書くのね」

「ああ」

「よかった。小説を書いた頃のユウト、とても活き活きしてたし、私そんなユウトが好きだったんだもの」

「書いたら、読んでくれるか？」

「もちろんよ。その代わりに、私が一番始めの読者よ」

チサトは白い歯を見せながら、僕に向かって優しく微笑んだ。そして、僕はもう一度物語を書いてみることで、改めて自分自身を再構築しようと思心の中で強く誓っていた。

テーマパークは夏休みも終わったこともあって、土曜日にもかかわらずそれほど込み合っではいなかった。僕らはまず水族館を一回りし、それから海に向かって落ちるジェットコースターに乗って楽しんだ。僕はそうした東の間の非日常を存分に楽しみ、チサトと二人だけの空間を十分に味わった。仕事場で死んだように机に向かっている自分が別人のように思えた。でも、そうした夢のようなひとは長くは続かなかった。

それは、ひとしきりパーク内を巡り終わった頃だった。広場の片隅で、チサトがトイレから出てくるのを待っていた僕は、その視界の中に見覚えのある姿を発見して息が止まりそうになった。非日常の中に異世界が紛れ込んだような唐突さと意外さが、僕の胸の中に怒濤のように満ち溢れてきた。秋の到来を拒み続けるように、鋭く照りつける日差しだけが、いつまでも変わらずにそこにあった。

「ミサト」

僕がたまらずに近寄って声をかけると、ミサトは啞然とした表情でこちらを見たが、それはすぐに真剣な眼差しに変わった。

「今日は家族三人で来てるのよ。お願いだから大きな声出さないで」

「ごめん。不意に目に入ったものだから、つい声かけちゃって」

「じゃあ、そういうことだから」

「ちよつと待てよ。話が見たいんだ。あんな風にミサトと別れて、俺、本当に辛かったんだ。だから……」

「わかったわ。ここじゃ何だから、十分後にメリーゴーランドのところで会いましょう」

ミサトは小声で告げると、すぐに僕から距離を置いて再び家族を待つ姿に戻った。

「お待たせ。じゃあ、行きましようか？」

その唐突な声に僕が視線を向けると、そこにはトイレから戻った

チサトが笑顔を浮かべて立っていた。

「ごめん、俺ちよつと忘れ物したみたいで、探してくるからしばらくここで待っていてくれないか？ なるべく早く戻るから」

「ちよつとユウト、どうしたのよ」

チサトの叫び声を背中であきながら、僕はミサトとの待ち合わせ場所に急いだ。チサトに対する後ろめたさが頭をかすめたが、僕はとにかくミサトとゆっくり話がしたかったのだ。そして、今の自分の正直な気持ちを打ち明けたかったのだ。

メリーゴーランドの前に立って十分ほど待っていると、真正面からこちらに向かって走ってくるミサトが見えた。ミサトは息を切らせながら僕の前まで来ると、しばらく呼吸を整えていたが、やがて落ち着いたらしくこちらを見ながら言った。

「さっきはびっくりしたわ。どうしてここにいるの？」

「チサトと一緒に遊びにきたんだ」

「チサトは？」

「さっきの広場で待ってるよ」

「そう。それで、話して何？」

「俺、いろいろと考えていたんだけど、やっぱりミサトのことが忘れられないんだ。もちろん、チサトと付き合っている身でこんなことを言うのはおかしいけど、チサトとは違った意味で、ミサトのことも好きなんだ」

「チサトは私の妹よ」

「わかってるよ。でも……」

「わかったわ。よくわかったから、それ以上は言わないで。私もユウトのことが好きよ。もちろん今も。でも、やっぱり妹は裏切れないの。チサトだけは……それだけはわかってほしいの」

そう言っただけで願うような目でこちらを見つめるサトミに、僕はそれ以上の言葉を口にできなかった。でも、頭の中ではわかっていても、自分の気持ちに嘘はつけなかった。そして、ミサトに対する溢れ出る想いは、最終的な行動となって僕を激しく突き動かした。

「好きだよ」

僕はミサトの体を抱き寄せると、導かれるままにその唇を求めた。ミサトは少し嫌がる素振りを見せたが、やがて僕の唇を静かに受け止めた。背後で廻っているメリーゴーランドの姿も、それが奏でる音楽も気にせず、僕らはそうしてお互いの気持ちを確認合った。そのことが波乱の幕開けとなることも知らずに。

僕がミサトとの幻想的な世界から舞い戻って目を開けると、正面には呆然とした姿で、でも焦点のはつきりとした目線でこちらを見つめるチサトがいた。

「何……してるの？」

チサトの声にミサトも敏感に反応し、僕らは不自然に互いの体を解き放ち、そのままチサトと向かい合う形となった。

「何がどうなっているの？ どうして姉さんがここにいるの？ どうしてユウトと……」

でも、チサトの言葉は後に続かなかった。彼女の目からは一筋の涙が流れ出し、音もなく頬を伝った。僕はチサトに対して何を言ったらいいのかわからずに、ただその涙の行方を眺めていた。いや、僕が見ていたのは涙自体ではなく、その中に宿っているであろうチサトの哀しみだった。僕に裏切られた悲痛な叫びを、彼女はただその中に精一杯表現しているように思えた。そして、それは少なからず僕自身の心を深く抉り取った。

「チサト、あなたに隠していて悪かったわ。でも、私たちはもう終わったのよ。だから気にしないで。ユウトとは……ホリベくんとはもう何でもないの」

ミサトの懸命な訴えも、もはやチサトの耳には届いていないようだった。チサトは意を決したようにこちらに背を向けると、そのまま振り返りもせず走り去っていった。でも、次第に小さくなっていくチサトの後ろ姿を見ながらも、僕はその後を追いかけてようとはしなかった。

「ユウト、追いかけていいの？ このままじゃ、あなたたち本当に終わっちゃうわよ」

「あるいは、これでよかったのかもしれない」

「えっ？」

「多分、これでよかったんだ。俺は本当のところ、チサトを愛してはいなかったんだ。確かにチサトといると心が落ち着くし、言いたいことも言い合えるし、お互いに分かり合える関係だけど……それだけなんだ。それしかないんだ」

「それしかないって、それで十分なんじゃないの？」

「大学の頃は、俺もそう思っていた。でも何かが足りなかったんだ、決定的に。一度別れた時には、それが何だったのかよくわからなかったんだけど、最近になってやっとわかったんだ。ミサトがそれを教えてくれたんだ」

「私が？」

「ああ。だから、チサトと再会して付き合うようになってからも、いつかまたこういう時が来るんじゃないかって思っていたんだ。遅かれ早かれ」

「決定的な何かが足りないから？」

「もちろん、今度こそうまくいくんじゃないかと思っただから付き合い続けたんだけど、やっぱり駄目だった。昔と変わらなかった」

「もしよかったら、教えてくれない？ その決定的な何かっていうのを」

「宿命的な想いっていつのかな。うまく言えないんだけど、男と女って、分かり合ったり信じ合ったりする前から、どうしようもなく決まっていることってあるだろ？ あるいは、それはインスピレーションみたいなものなのかも知れないけれど、相手の顔立ちを見たり性格を理解する前から、既に決まっているものがあるような気がするんだ。たとえば性格や気が合わなかったとしてもね。根本的な部分で結びついていてものが既にあって、相手の性格や状況は後からついてくるものなんじゃないかって」

「それは、赤い糸で結ばれた運命みたいなもの？」

「綺麗に言えばね」

「でも、それって逆に後から感じるものなんじゃないかしら。振り返ってみて、これは運命だったんだって思うんじゃないの？」

「そうかもしれない。でも、少なくとも今の俺にはそうは思えないんだ。まず最初に宿命的な想いがあって、後からいろいろなものがついてくるような気がするんだ」

「……まあいいわ。それで、その宿命的なものを私には感じたけれど、チサトには感じなかったのね」

僕は、言葉で答える代わりに自分の首をゆっくりと上下させた。天空に輝く太陽は既に西に傾いていたが、その勢いは衰えずになおも二人の間に眩い光を放ち続けていた。

「正直に言っつて、ユウトにそんな風に想われてとても嬉しいわ。でも、チサトとはこれからも付き合っつてほしいの。あの子本当にいい子だし、ユウトもきつと幸せになれるわ。難しいことはよくわからないけれど、人それぞれに愛の形があるように、ユウトの心の中にもいろいろな愛の形があつていいと思うの。だから、チサトを幸せにしてあげて。いずれにしても、私たちはもう終わつたんだから」

ミサトはそう言つと僕に背を向け、それからゆっくりとした足取りで家族の待つ場所へと歸つていった。ミサトに言われるまでもなく、僕は自分の心の中に様々な愛の形を発見していたし、二人の姉妹に対する想いがそれぞれに異なることもわかつていた。問題なのは、その優先順位なのだ。僕は宿命的にミサトのことが好きだったし、現実的にチサトのことが好きだった。あるいは非日常と日常と言つたほうがいいかもしれないが、いずれにしても僕にとつては、現実よりも宿命のほうが、日常よりも非日常のほうが大切だったのだ。不条理だろうが何だろうが、それが僕自身の正直な気持ちだった。だから僕は、あえてチサトを追いかけなかったのだ。たとえばそのことで、自分が不幸の淵に追いやられてしまうとしても。

でも結局のところ、僕は二度とミサトに会うことができなかった。いや正確に言えば、同じ場所に勤めているのだから、廊下で偶然にすれ違うこともあつたが、それは既に会うという概念を外れるもの

だった。チサトにも何度か電話をかけたが、携帯からも自宅からもその声を聞くことは叶わなかった。チサトのアパートに出向くことも考えたが、僕自身がそれを押しとどめた。チサトは僕にとってかけがえのない大切な女だったが、唯一の女ではなかったからだ。そう、僕はここに至って二人の女を、姉妹を同時に失うことになってしまったのだ。でも不思議なことにそこに後悔はなかった。ただ心の中に虚しさが広がり、殺伐とした寂しさが募っただけだった。僕は、毎晩のようにデニス・デ・ヤングの「デザート・ムーン」を聞きながら、何年ぶりに味わうそんな寂寥感に懸命に耐え、その状況に慣れようとしたがそれは無駄な試みだった。何故なら僕自身が、求めるべきものが他にあることを本能的に悟っていたからだ。そしてそれがはつきりとわかったのは、テemaparkでの一日から一週間が過ぎた、物憂げな雨の降る日曜日だった。

その日の夕方、僕は自分の住むアパートを出ると、駅近くのコンビニでワインを買い、それから踏み切りを横切って南に歩を進めていた。天空からは久しぶりの雨がしたり落ち、僕はビニールの傘をさしながら目的地へと向かった。午後六時を少し廻った町は、次第に薄暗さを増していたためか、あるいは降りしきる雨のせいなのか、どこことなくうらぶれた寂しい雰囲気醸し出していた。そう、僕は今まさにサトミのアパートに着こうとしていた。この一週間の寂しさに耐え切れずにサトミに電話したのは昨日の夜のことだったが、描いている絵を仕上げる関係で外には出られないと言ったので、唐突ながらサトミの家に押しかけることになったのだ。僕は最初、絵を描く邪魔になることを考えて行くのを躊躇ったが、とにかく自分の胸中の想いを誰かに、特にいろいろな事情のわかるサトミに聞いてもらいたい一心だった。

アパートの二階の部屋のブザーを押すと、開け放たれた扉の向こうには、二ヶ月前と同じ格好のサトミが立っていた。気だるそうな眼差しは相変わらずだったが、そこには既に僕を苛立たせるものもなかった。サトミは僕を部屋の中に招き入れると、キッチンのおそばにあるテーブルに座らせた。奥のほうには彼女のベッドと描きかけのキャンバスが無造作に置いてあり、全体的には雑然としていたが、どこか訴えかけるような雰囲気を持ち合わせている部屋だった。

「狭い部屋だけだね」

「いや、こっちこそ急に押しかけちゃって悪かったな。あつ、ワイン買ってきたんだ。後で飲もうよ」

「今飲もうか？ もっとも、気の利いた食べ物は何もないけど」

サトミはそう言うと、冷蔵庫からカマンベールチーズとクラッカーを出し、二人分のグラスとともにテーブルの上に置いた。グレーのTシャツとスウェットを着た彼女は飾らない自然体だったので、

僕はそのことに奇妙な安らぎを抱いた。

「絵を描いていたのか？」

僕がグラスにワインを注ぎながらそう尋ねると、サトミは口元を少し緩めながら軽く頷き、それからいつもの気だるい言葉遣いで続けた。

「あと少しで完成なの。だから、このまま一気に描ききっちゃおうかなと思って。その時の勢いって結構大事だから」

「じゃあやっぱり、邪魔して悪かったかな」

「いいのよ。ちょうど一息入れたかったところだから。それに、本当に嫌だったら最初から断ってるわよ。そんなに気を遣うタイプじゃないから」

「ならいいんだけど……。この前ヨルダンで描いていた絵なのか？」

「そうよ。二ヶ月かかったけど、ようやく完成するわ」

サトミは感慨深げにそう言うと、グラスの白ワインを一気に飲み干した。

「これ、美味しいわね。高かったんじゃないの？」

「いや、コンビニで買ってきたやつだから」

「何だ、そうなの……。で、何か私に話があるんじゃないの？」

「ああ、実は俺、チサトと駄目になりそうなんだ」

「この間、また付き合い始めたばかりじゃない」

「まあ、そうなんだけど」

「さては、何かあったわね。話してみなさいよ。力になれるかどうか分からないけど」

「俺、前からミサトと付き合い合っていたんだ」

「だって、ミサト姉さんは……」

「その通りさ。だからチサトとまた付き合い始めたんだけれど、俺やっぱりミサトが忘れられなかった。チサトも好きだったけれど、俺にとってはミサトのほうがどうしようもなく好きだったんだ」

「じゃあ、これからもミサト姉さんと付き合い合っていくの？」

「いや、こうなった以上はもう付き合い合えないって言われて」

「そう」

「そうって、驚かないのか？」

「驚くも驚かないも、いろいろなことが偶然に重なっただけのことじゃない。好きになっただ人に偶然家族がいただけだし、二人の女性が偶然姉妹だった。ただそれだけのことよ」

「それが、サトミの姉さんたちだったとしても？」

「ええ。まあ、あまりに身近だったから少しは驚いたけど」

「サトミは大人だな。俺なんか、その偶然だけで夜も眠れなかったのに」

「人を好きになるって、結局そういうことなんじゃない？ 結果的に状況が悪くなることもあるけど、仕方ないんじゃない？ 運命っていつか……」

「宿命的な想い」

「ちよつと聞こえが悪いけど、まあそういうことよね」

自分でグラスにワインを注ぎながら自然体の表情を浮かべるサトミにある確信をもった僕は、聞くべくして次の言葉を解き放った。

「俺たちの場合はどうなのかな？」

「どつって？」

「俺たちの間って、宿命なのかな？」

「当たり前じゃない。だからあなたはここにいるの」

「ストーリー呼ばわりしたくせに？」

「最初はね。でも、今は違っわ」

何気なく放たれたサトミの言葉に、僕はお互いの想いが近づいていることを直感した。秋を告げる雨音をかすかに聞きながら、僕は次第に収斂していく自分の気持ちを静かに噛み締めていた。

「最初は本当にストーカーだと思ったのよ。だってあんな風に夜いきなりやってきて、これあなたの財布でしょ？ って言われても、何この人って感じだったわ。まあ、財布を落としたのに気がつかなかった私もどうかしてただけだね」

「会社からの帰り道に偶然拾ったら、中に免許証が入っていたから、交番に届けようか放り投げようか迷っただけけど、自分の家の近くだったし、暇だったから届けようと思ったんだ」

「ふうん。まあ、放り投げようかっていうのはひどいと思うけど、これでも感謝してたのよ、一応はね。でも、あんまり唐突だったから」

「俺も、あの時は結構ムカついたんだぜ。確かに夜、いきなり行っただのは悪かったとしても、人がせつかく大切な財布をわざわざ届けてやったのに、この女は一体何様のつもりだって思った」

「そう。でも不思議よね。そんな二人が、二ヶ月経った今ではお互いを宿命的に想ってるなんてね」

そう言って天井を見上げるサトミに、僕は次のワインを二人のグラスに注ぎながら尋ねた。

「最初からわかってたのか？」

「何が？」

「宿命だつてことがさ」

「はつきりとわかったのは今日だけど、今思えば……『デザート・ムーン』の時かな」

「ヨルダンで偶然に会った時？」

「そう。『デザート・ムーン』って確かに昔の曲だけど、知っている人ってそうはいないわ。それをあなたは知っていた」

「ミサトが好きな曲だったからな」

「もちろん、それもあるだろうけど、私その時に直感したの。この

人とは結ばれているってね」

「じゃあ、何故その時に言ってくれなかったんだ？」

「さっきも言ったように、まだ自分でも確信が持てなかったの。ただ言っていなかったかもしれないけど、私には同じ大学に通う彼がいるし、そういう直感めいたものって何か、さすがに理不尽なように感じたから。でも、何度か偶然にあなたと会って、いろいろな話をしていくうちに、次第に自分の想いが確信に変わっていったの。

私はこの人を求めているんだって。もつとも、あなたはチサト姉さんと付き合っていたし、姉妹でそういうのって気が引けたから、こっちからは連絡しなかったの」

「そうだったのか。実は俺も、ヨルダンでサトミと会った時に、何かひっかかるものを感じていたんだ。ほんの少しだったけれど、心の揺れを感じた。もちろん、それが宿命的な想いだとわかったのは今日だし、何よりミサトとのこともあったから、自分で本当の気持ちはどこにあるのかがよくわからなかったんだ。ミサトとはもう一年以上も付き合っていたし、チサトとのこともあったけれど、とにかく俺はミサトに宿命を感じていたから、正直サトミをそれほど意識していなかった。俺の宿命が実はサトミだったなんて、自分自身でさえ気がついていなかったんだ。でも、もうそんなことはどうでもいいんだ。俺は今サトミを求めている。どうしようもなく」

「宿命的に？」

「ああ。あるいは非日常的に」

サトミは僕のその言葉の後、少しうつむいたままグラスの縁を指でなぞっていたが、やがて決心したかのように僕に言葉を投げかけた。その眼差しは鋭く、いつものような気だるさはなかった。

「私を抱いてみる？」

「でも、ミサトには彼氏が……」

「どうして今になってそんなことを言うの？ 不倫をして、姉妹で二股をかけて、しかも私の姉さんたちを相手にしていたあなたが」
サトミの言葉が僕の胸に鋭く突き刺さった。確かにその通りだっ

た。結局のところ僕は常識や理屈を無視した形で、自分の想いのままに動いてきた人間だった。今さらサトミの付き合っている男のことを考えること自体がおかしかったのだ。最後まで自分を貫き通すしか、僕が選ぶ道は残っていなかったのだ。

僕らは飲みかけのワインとグラスをそこに置いたまま奥の部屋へ向かい、サトミのベッドに並んで座った。そばにあったキャンバスの中には、二ヶ月前に目の当たりにしたヨルダンの遺跡が静かに佇んでいた。

「これが宿命だったのよ」

サトミはそう呟くと、僕の首に自分の腕を絡ませてきた。僕はそんな彼女の存在を確かめるように肩を抱き寄せると、引き寄せられるようにその薄い唇に向かった。そして、サトミの口の中に自分の舌を這わせながら、宿命が意味するものを本能的に、そして官能的に理解しようとした。既に雨音が聞こえなくなつた薄暗い部屋の中で、僕らはお互いに自分の心の奥底を、生きている意味をその行為の中に見出そうとしていた。

目を開けると、正面に白い平面が見えた。それが天井だとわかるまでに多少の時間がかかったが、自分の部屋でないことはすぐにはわかった。僕はベッドから上半身を起こすと、夕べのワインでぼやけた頭をゆっくりと横に振った。その瞬間に鈍い痛みが走ったが、次第にはつきりとしてくる意識を武器にそれを何とかやり過ごした。真横を見ると、そこには静かに寝息を立てるサトミがこちらに背を向けて横たわっていた。目の前には、カーテンの隙間から差し込んできた眩い光がベッドを斜めに横切っていた。僕は無造作に立ち上がると、窓を全開にして太陽の恵みをその体一杯に浴びながら伸びをした。そうして見る外の景色は何もかもが真新しく、隣の家屋根を歩く猫にさえ新鮮さを感じた。でも、振り返った時に見えた壁掛けの時計を見て、僕は我が目を疑い凍りついた。九時を少し廻った時計の針は、僕にある完璧な事実を告げていた。そう、今日はまぎれもなく月曜日だった。僕は反射的に携帯電話を手にとると会社に連絡し、とりあえず風邪で休む旨を上司に伝えた。向こうの反応がよくわからなかったが、ともあれ了承されたことを確認すると、すぐそばでこちらを見つめるサトミを見ながら電話を切った。

「今何時？」

「月曜日……いや、朝の九時だよ。何か飲むか？」

「うん」

僕はおもむろにキッチンに向かうと、やかんにたつぷりと水を入れて火をつけた。その後、水の量が多過ぎたことに気づいたが、結局そのままにした。その分何杯もコーヒーを飲めばいいだけのことなのだ。

「今日はいい天気みたいね」

眠そうな顔でそう言いながら、下着姿でテーブルに座ったサトミを前に、僕は二人分のカップにインスタントコーヒーを入れながら

微笑んだ。

「何が可笑しいの？」

「いや、サトミって本当に天然だなんて思ってたさ」

「どういう意味よ」

「俺なんか、起きて時計見たら九時を過ぎていて、おまけに月曜日ときたから泡食っちゃって、慌てて会社に電話しているうちにすっかり目が覚めたっていうのに」

「それでさっき電話してたのね。私最近曜日の感覚がなくなってたから」

「学生だもんな」

「ここんところ、ひたすら絵を描いていたこともあったし」

僕が沸騰した湯をカップに注ぐのを見ながら、サトミはそう呟いた。カップから上る白い湯気が、僕らの間を音もなく過ぎっていった。

「今日はどうするんだ？」

「今日も描くわ。とにかく早く仕上げたいのよ」

「その前に、少し近くを歩かないか？　せつかくのいい天気なんだから」

僕はそうサトミを誘つと、コーヒーを一口含んだ。サトミは気だるそうな表情で何も言わなかったが、コーヒーを満足げに飲んでいく様子からその答えは明らかだった。

僕らはサトミの部屋を出ると、住宅街を抜けて近くにある公園に向かった。アスファルトの路面は夕べの雨の跡を太陽に照らされて光り輝き、僕は新しい一日の息吹をその肌全体で感じていた。サトミは、白いTシャツにデニム地の短いタイトスカート姿で僕の左斜め前を歩いていた。平日の朝の公園には人影も少なく、二人の母親たちが、砂場で小さい子供を遊ばせる傍らで親しげに話しているだけだった。僕らは近くにあったベンチに並んで座ると、ただぼんやりと目の前に佇む水溜りを見つめた。

「ねえ、後悔してる？」

「何が？」

「私と寝たこと」

「いや。だってそれは……」

「宿命だから」

僕が言い切る前にサトミが続けて付け足した。その後僕らは長い間そこにいたが、後にも先にも会話はそれだけだった。でも、僕はこの状況にこの上ない充実感を抱いていた。宿命的な想いの実現は、自然体の自分を意味することを体感していたからだ。そしてそれこそが、僕が僕であるために必要なことだったのだ。

次の日の夜、それは当然のことながら火曜日だったのだが、僕はほんの一ヶ月ほど前まで毎週のように来ていた池袋の喫茶店の席を一人で暖めていた。店内には以前と同じようにオールディーズの音楽が流れていたが、そこに「デザート・ムーン」がかかることはなかった。頭の中では午前中の出来事が鮮明に蘇っていたが、僕はそのことを後悔していなかった。サトミとの宿命を全うするためには、ミサトへの過去の宿命を断ち切らなければならなかった。ミサトやチサトとのことをはつきりと精算したうえで、サトミとの新たな関係を築き上げていかなければならないのだ。そしてそれこそがこれまでの自分との決別となり、ひいては新しい自分との出会いへと繋がっていくのだ。だから僕は、午前中脇目も振らずにミサトが働く部署に顔を出し、半ば強制的に彼女と会う約束を取り付けたのだ。「話って何？」

その声で僕が現実に立ち戻ると、目の前には少し苛ついた様子のミサトが座っていて、こちらをやや怪訝そうに見ていた。

「急に呼び出して悪かったな」

「昼間は驚いたわ。だって、いきなり職場に現れるんだもの。しかも思いつめたような顔で」

「最後に、どうしてもミサトに話したいことがあるんだ」

僕のその言葉に、ミサトは返事をしてはくれなかったが、その代わりに話の内容を伺うような目つきでこちらに訴えかけてきた。ミサトは相変わらず学生のような服装をしていたが、その視線は明らかに以前のものとは違っていた。そこにかつて感じたような安らぎを見出すことはできなかった。

「俺、サトミと付き合うことにしたんだ」

「えっ……チサトじゃないの？」

「今ようやくわかったんだ。俺にとって本当に必要なのは誰なのか。」

誰に対して宿命的な想いを抱いていたのかが

「ちよつと待って。話がよくわからないんだけど、どうしてサトミなの？」

「理由なんてないんだ。いや、本当はあるのかもしれないけれど、言葉ではうまく表現できないんだ。ただひとつはつきりとしていることは、俺は今サトミを求めているということなんだ」

「サトミが本当の宿命の人だったってわけ？ 私じゃなくて」

「サトミも同じ気持ちだった。もっともつい最近まで、お互いに自分の気持ちに確信が持てなかったんだけれど……。ミサトのことも本当に好きだった。どうしようもなく愛していた。でも、今そばにいてほしいのはサトミなんだ」

僕の話を、ミサトはただ平板な表情で聞いていた。いや、聞いてすらいなかったのかもしれない。それほど彼女には感情の表現が全くなく、僕は自分の声が届いているのかさえ確信が持てなかった。

「わかったわ。それが今のユウトの本心なのね。それで、どうしてわざわざ私にそんなことを言うの？ 前にも言ったけれど、私たちはもう終わっているのよ」

「そのままにしたくなかったんだ。終わらせるにしても、俺なりに何かケジメのようなものをつけたかったんだ。自分の気持ちをミサトに正直に話して、それから何もかもを新しく始めたかったんだ」

「それって、聞こえはいいけど本当に自分勝手よ。サトミは私の妹よ。チサトとのこともあるし……。それに、大体私の気持ちはどうなるの？」

「だって、今終わったって……」

「私たちの実際の関係は終わっても、気持ちはすぐには終わらないわ。あなたはサトミとうまくやっていけば幸せでしょうけど、私の気持ちは置いていかれるのよ。真っ暗闇の中でどこにいけばいいのかもわからないのよ。どうしてそんなこともわからないで、平気で勝手なケジメをつけるの？」

ミサトはその問いかけを僕の心に突き刺したまま、席を立って足早に店を出ていった。そうして一人取り残された僕は、頭の中を整理する間もなくただその場に佇むしかなかった。ミサトを傷つけてしまったという事実だけが、抗いようもなく目の前に突きつけられていた。ミサトの言うとおり、僕はまぎれもなく自分勝手だった。自分の気持ちを整理することだけに目が向いていて、ミサト自身の想いを全く考えていなかった。そしてその意味で、僕はやはりミサトと付き合う資格のない男だった。人影の全くない店の一角に身を置いたまま、そうして僕は自分の愚かさを噛み締め、同時にこれらのサトミとの関係をも危惧していた。

次の日、僕は会社を定時で上がるとそのまま電車に乗ってチサトの住む町に向かった。夕べのミサトとのやり取りが未だに頭全体を覆っていて、仮にチサトと話したとしても、その二の舞になることは十分に承知していたが、それでも僕はあえてチサトと会うことにした。むしろそのことで、一刻も早く会いたい欲求に駆られたのだ。そう、僕は純粹にチサトに謝りたかったのだ。宿命的な想いを抱いていなかったにもかかわらず、その居心地のよさに甘え続けていたばかりか、結果的に一度ならず二度までも傷つけてしまったことに對して、ただひたすらにその罪を償いたかったのだ。たとえば、それが決して許されないことであつたとしても。

約一ヶ月ぶりに訪れたその町は、相変わらず小ぢんまりとしていたが、あの時僕に寄り添っていたチサトの姿は既になかった。夜の七時を目前にして昼間の暑さは影を潜めていたが、駅前通りを十分ほど北に向かい、狭い路地に入った場所にある真っ白なアパートを目にした時には、やはり体中から汗が滲み出していた。僕はさつそく一階の角にある部屋の前に立ち、ドアの横にあるブザーを押してみたが、目の前にあの淡色系の空間が広がることはなかった。僕は諦めずに何度もブザーを押してみたが、結果は同じだった。考えてみれば、チサトの会社からではこの時間に辿り着くことは難しく、まして残業や飲み会があればいなくても当然だったが、そんな周知の事実を忘れるほど、僕自身はひどく慌てていたのだ。ただ何かに突き動かされるようにここに来てしまったのだ。僕はその辺でチサトの帰りを待とうかとも思ったが、結局そのまま自分のアパートに帰ることにした。冷静になつてみると、勢いのままに来てしまったことで、自分の気持ちの伝え方を用意していなかったこともあつたし、正直なところチサトに会うこと自体が怖かったせいもあつた。でも何より、実際に会って話をするよりも、何か他の形で自分の想

いを伝えたほうが確実だと思ったからだ。チサトを傷つけないためにも、そして何より自分が傷つかないためにも。そう、僕はここに至って急に臆病になっていったのだ。

家に帰ると、僕はさっそくテーブルの上我便箋とボールペンを置き、冷蔵庫から取り出した缶ビールをその脇に添えた。手紙でも小説でも、最初の書き始めに時間がかかるのが昔からの癖だったからだ。僕はビールを一気に飲み干してから、目の前にある真っ白な空間を見つめた。そこに何かの暗示があるかとも思ったが、物事はそうたやすいものではなかった。僕はひとしきり頭を巡らせてから、おもむろにボールペンを手に取った。

チサトへ

もしかしたら、君はこの手紙を読んでくれないかもしれない、封を切らずに捨てられてしまうかもしれないけれど、それでも俺は、このことだけは言わなければいけない、書かなければいけないと思つてペンを手にしました。

俺は、ただ純粹に君に謝りたい。君の許しを乞いたい。大学の時も、そして今回も、本当にすまなかつた。いや、そんな軽い言葉だけで許されるとは思っていないけれど、今の俺にはこう言う以外に術がありません。もちろん、全ての原因は俺にあります。君は全く悪くない。結局のところ俺は君に甘え続け、そして君の心を弄んでしまった。あるうことか君の姉さんと付き合い、決定的に君を傷つけてしまった。自分の気持ちだけを考えて、君を含めた周りの人のことなど考えてもいなかった。だから、いつかは俺にも天罰が下りそうな気がします。俺自身も早晚決定的に傷つくでしょう。

今さら言い訳はしません。いや、する資格もありません。君には罪の償いようもないけれど、とにかく幸せになつてください。陰ながら祈っています。そして、今まで数々の想い出をありがとう。

それだけを書き切ると、僕は肩の荷を下ろしたような安堵感を味

わうと同時に無性に寂しくなった。心の中を抉り取られたような虚無感に苛まれた。そして次の瞬間、自分自身に対する腹立たしさが地中から噴き出そうとするマグマのように猛然と湧き出てきて、僕を完膚なきまでに覆っていった。もはやビールさえも、その勢いを押しとどめることはできなかった。僕は傍らにあった携帯電話を手にする、ただ一直線にサトミの番号を指で辿った。もう僕にはサトミしかいなかった。今となってはサトミだけが宿命の女であり、唯一の救いだっただの。

でも僕は、その救いの声を聞くことができなかった。次の日もまた次の日も、僕は昼夜を分かたずに数え切れないほどの電話をかけたが、ただの一度も繋がることはなかった。最初の頃は携帯を家に置き忘れたり、あるいは電源を切っているのだからとも思ったが、金曜日の夜に至って底知れぬ不安に苛まれた僕は、翌日の午前中にサトミのアパートへ向かった。

駅のそばにある踏み切りを横切って大通りを南へ向かうと、背後から通り抜ける風が僕の頬を優しく撫でていった。朝の眩い日差しは未だに夏の暑さを感じさせたが、風の流れには明らかに秋の気配があった。僕は、洗いたてのジーンズが脚に触れるのを感じながら歩を進め、やがて薄青色のアパートに辿り着いた。足早に階段を上り、二階にある部屋のブザーを押したが、何度繰り返してもサトミのあの気だるそうな顔を見ることはできなかった。僕は、ようやくサトミが部屋にいないことを理解すると、階段を下りて一階の管理入室を訪ね、彼女のことについて何か聞いていないか尋ねてみた。案の定サトミは出かけていて、半月は帰らない旨を管理人に告げていた。でも、その行く先を耳にした僕はどうしようもなく途方に暮れてしまった。そして、半月どころではなく当分の間は帰らないであろうことを直感した。おそらくサトミは、完成間近のあの絵の何かに疑問を持ち、もう一度現物を目の当たりにして確かめたい欲求に駆られて飛び出したのだ。荒野の中にひっそりと佇むあの遺跡のあるイスラムの地へと。

僕は急いで自分のアパートに戻ると、取りあえずの荷物をまとめ、駅から電車で飛び乗った。サトミに二度と会えないかもしれないという想いだけが、ただ僕を突き動かしていた。今サトミと離れてはいけないという本能が働いたのかもしれないが、少なくとも彼女は彼女がしばらくは戻ってこないことだけは確かだった。何事におい

ても、特に自分が好きなことには納得がいくまで突き詰めるのが彼女の流儀であることを、僕は体験的によく知っていたからだ。

成田空港に着くと、僕はさっそく必要なだけの金を下ろし、それから航空券の手配をした。一人で中近東に行くことになんかの不安はあったが、何よりサトミに会いたい欲求のほうが遥かに強かったのだ。そして、一通りの準備が終わると、飛行機の出発時間まで喫茶店でコーヒーを飲み、それからウチノに電話をかけた。

「ああ、ホリベか。何か用か？」

「実は今、成田にいるんだけど、急にまた中近東に行くことになったんだ」

「何だつて。今から行くのか？」

「ああ。理由はまた帰ってきたら話すけど、会社のほうには適当に言っておいてくれないかと思つてさ」

「適当に言つたつて、中近東じゃ二、三日つて訳にはいかないんだろ？」

「まあそうなんだけど、どうしても行かなきゃいけないんだ。だから何とか頼むよ」

「……わかつた。理由はともかく、お前がそこまで言つんなら余程のことがあつたんだろ。職場のほうには何とか適当に言つておくから、納得がいくまで行つてこいよ」

「ありがとう。恩に着るよ」

「でも一つだけ。土産だけは忘れるなよ。あと、体にも気をつけてな」

ウチノの配慮と励ましに感謝しながら僕は電話を切り、それから改めて、これから自分のしようとしていることを考えてみた。確かに、冷静になつてみると馬鹿げた行為だし、仮に向こうに行つてもサトミに会える保証は全くなかつた。何事もなかつたように、半月で完成された絵を持って帰つてくるかもしれない。でもやはり、僕は今行かなければならなかつた。一刻も早くサトミに会つて、お互いの間にある宿命を確かめ合いたかつたのだ。これからの二人の

ためにも、そして何より自分の人生を救うためにも。

一体俺は何をしているのだろう。何故こんな所にいるのだろう……でもその答えは既に僕の手の中であつた。サトミと会うために、そして何より一人の人間として躍動感のある生き方をするために、僕は迷うことなく日本を離れ、この無限に広がるアラビア世界の大地を踏みしめていたのだ。これまでの非人間的な日常から脱却し、非日常的でも人間的なサトミとの宿命を貫こうとしていたのだ。

僕は、再び裸の上半身にリュックを背負い込むと、長い間座り込んでいた岩のかけらからしっかりと立ち上がった。九月も半ばを過ぎたとはいえ、容赦なく照りつける灼熱の太陽さえも、もはや行く手を阻む障害とはなりえなかった。ペットボトルのミネラルウォーターは既に空になっていたが、僕は全く気にしていなかった。目の前に立ちはだかる岩山を登りつめれば、そこには気だるそうな表情を浮かべたサトミがいて、不釣合いな笑顔を見せながら水を差し伸べてくれることを信じていたからだ。そう、夢幻のように思えた目的地は、今現実となって僕の目にはつきりと見えていたのだ。

遺跡へと向かう山道は思っていたよりも険しくはなかった。それは以前と同じように崖の上へはりつくように延々と続いていたが、僕は一度も休むことなく歩を進めた。サトミと会えるという一念だけが、ともすれば朦朧とする意識を呼び戻し、脚に再び活力を取り戻させた。デニス・デ・ヤングの「デザート・ムーン」が何度も頭の中で繰り返し返され、僕はそのメロディーに背中を押されるように目的地へと急いだ。

一時間ほどで遺跡に辿り着いた僕は、あの時と同じように神殿の彫刻物を目の当たりにした。でも、そこにサトミを見出すことはできなかった。僕は、これまで意識していなかった疲労を感じてその場に膝まずき、半ば呆然としながら周囲を見渡した。その空間は決して広くはなかったが、人の気配というものを全く感じさせなかつ

た。僕はもはや何も考えられなくなり、遺跡の隅の岩陰で飲み物を売っている現地の老人に気づくまでにかかなりの時間を要した。でも、その隣に座っていた白いTシャツにカーキ色のショートパンツ姿の女性を見て、ある決定的なイメージが頭の中に浮かんでくるのを感じた。そして迷彩色のキャップを確認するに及んで、それははつきりとした形となって僕の目の前に提示された。

「サトミ！」

日本から遠く離れた異界の地の果てで、僕はそうして彼女の名前を呼びながら走り出していた。

でも、顔を上げたその女性を間近で見た僕は、それがサトミではないことを十分に認識した。小麦色以上に日焼けをした顔立ちのせいで、遠目ではわかり辛かったが、明らかに他人を見るその眼差しが別人であることを証明していた。

「あなた、誰？」

「あつ、すみません。人違いでした」

「サトミって、ひょっとしてハセベ サトミのこと？」

「ええ、そうですね。どうして……」

「私、サトミの友達なの」

その言葉に僕は混乱し、頭の中で真実のありかを必死に模索したが、それは虚しい試みだった。極度の疲労が思考能力を鈍らせ、サトミに会えなかった精神的なダメージがさらに追い討ちをかけていた。

「どうかしたの？ 随分疲れているように見えるけど」

「いや、もう何が何だかよくわからなくて」

僕は独り言のように呟きながらその女性の横に座り、それから喉の渇きを思い出して老人からコーラを買った。水に浸されていた割には、その温さはまた格別だった。

「そう言えば、まだ私の名前を言ってなかったわね。ワタベ ミサトっていつの」

「ミサト？」

「そう、サトミを反対にした感じよね。それに、全体的な名前のイメージがサトミとよく似てるのよね。もちろん偶然だけど」

彼女……ミサトの言葉に、僕はうまく会話を続けることができなかった。サトミと名前が似ていたからではなく、今頃は日本で家族と共に戯れているであろう、あのミサトが目の前を過ぎったからだった。僕の頭は再び痛みを増し始めた。

「どうかしたの？ 暑さにもやられた？」

「いや、何でもないんだ。それで、サトミとは？」

「同じ大学で絵の勉強をしているの。まあ、クラスメイトってところかな。今回も、サトミが急にここに来てたって言うから、もの珍しさで一緒についてきたんだけど」

ミサトはその大きな目をさらに大きくしながら僕にそう説明した。彼女に見られると、僕は底なしの井戸に引き込まれるような気がした。

「で、サトミは？」

「今はいないわ」

「だって、今一緒に来たって……」

「昨日までは一緒だったんだけど、今頃は多分死の海にいると思うわ。サトミとは今朝別れたの。私はそろそろ日本に帰ろうかと思つて、最後に気に入ったここにもう一度来てみたんだけど。大学も始まるしね」

「確かに死の海に行くって言うってたのか？」

「ええ。当分日本には戻らないみたいよ。あちこち回ってみたいって言うってたし」

「他に何か言ってたか？ 例えば、男のこととか」

「そうね……ああ、彼氏とは別れるって言うってたわ。他に好きな人ができたからって」

「それから？」

「ところで、あなたは誰？ サトミとはどついう関係なの？」

「ああ。俺の名前はホリベ ユウト」

「あなたがユウトさん。サトミから聞いてるわ。宿命を感じた相手だつて。でも……」

「でも、何？」

「あなたとは、やっぱり付き合えないって言つてたわ」

何事もなさそうに言うミサトに、僕は返す言葉もなく固まった頭を必死に解そうとした。唯一の救いであつたサトミが言つたであろうその一言は、これからの自分の人生を否定することにもなりかねなかつた。気の抜けたコーラの缶を手にしたまま、僕はただうんざりしながら頭上の太陽を仰ぎ見るしかなかつた。

「その理由を言つていなかった？」

「そうねえ、特に言つてなかつたと思うけど……。ああ、そう言え
ば」

「何？」

「別に関係ないかもしれないけど、ここで絵を描いている時に、これからユウトと付き合つていっても、私は多分どこにもいけないって言つてたわ。この絵から輝きが失われるって」

「どこにもいけないって、サトミは確かにそう言つたんだね」

「私には、その意味がよくわからなかつたけど、ユウトさんならわかるんじゃない？」

それだけを言つと、ミサトは被つていた帽子を外して、天空を仰ぎながら軽いため息をついた。僕は、そこに現れた茶色のシヨートヘアを見ながら、サトミの言つたことを頭の中で繰り返し唱えてみた。僕と付き合つとどこにもいけないなり、さらには絵から輝きが失われるという言葉は、確かにある事実を暗示しているように思えた。でも、具体的に何を意味するのかがよくわからなかつた。宿命的な想いだけではない何かを、サトミが感じたことは間違いなかつたが、それはあまりにサトミらしくなかつた。自分の想いのままに行動しているはずの彼女に、心境の変化でも起きたのだろうか。いずれにしても、僕はやはりサトミと会わなければならなかつた。会つてそれを確かめるしかなかつた。

次の日、僕はミサトが教えてくれた死の海へと向かった。サトミと会えるかもしれない僅かの希望を胸に抱きながら、長距離バスに乗ってそこに降り立ってはみたが、目の前には数少ない観光客と、その向こうに茫漠たる海が広がっているにすぎなかった。僕は、泥の浜辺を歩きながらその水を舐めてみたが、あまりの塩辛さに口が歪みそうになった。これでは、魚が一匹たりとも棲めないことも頷けた。その後、浜辺を中心にしばらくの間サトミを探してみたが、やはり若い女性の影を見出すことはできなかった。来た時は天頂に君臨していた太陽も、既に荒野の果てに没しかかり、僕はただ呆然としながら目の前の海を眺めるしかなかった。結局のところ、僕はサトミに会えないばかりか、彼女が置いていった言葉すら理解できなかった。そして、その気だるい笑顔が見られないことにやるせなさを覚え、やがて絶望的な虚しさとなって僕自身を深く覆っていた。

『大丈夫。あなたはもう、その答えを知っているわ。ただ、そのことを認めたくないだけなのよ。ありのままを受け入れさえすれば、真実は必ずあなたの胸の中にあるわ』

神の啓示のような、そして天使のように透き通るその声に僕が後ろを振り返ると、そこには現地の女の子が夕闇に浮かぶように佇んでいた。十歳くらいに見える彼女は、イスラムの神秘的な目をこちらに向けながら、僕に何かを訴えかけていた。初めのうちは、彼女が言ったと感じた言葉だったが、実はその右手に握られていたテープレコーダーからだった。そしてその声は、さらに僕に向かって真実を語りかけてきた。

『確かに私はあなたに宿命を感じたし、現にあなたのことが大好きよ。でも、あなたといっても、私はもうどこにもいけないの。私はこれまで、非日常の中にリアリティーを求める生き方をしてきたし、

だからこそ私の絵も輝いていた。でもあなたといると、私は日常の中に身を埋もらせて、そこに安住してしまいそうな気がするの。もちろん、それはそれで幸せなんだろうけど、少なくとも私は今それを求めてはいないの。刺激的な非日常の中で、私自身を、そして何より私の絵を描き続けていきたいの。だから、あなたとはやはり付き合うことはできません。その意味であなたと出会えたことが宿命なら、別れることもまた宿命だったのかもしれない。でも、私は後悔してはいないわ。何故なら、それはあなたを宿命的に愛していたから……。私はしばらく日本には帰らないでしょう。この十分に非現実的なイスラム世界で、自分自身をもっと求めていきたいと思っているから。だから、もしあなたが偶然にもここに立ち寄ったなら、この声を最後に私のことは忘れてください。いつかどこかで、あなたの小説が読めるのを楽しみにしています』

テープの声はそこで終わっていた。目の前の女の子は、なおも僕に何かを投げかけているように思えたが、やがて薄暮の間にその姿を隠してしまった。僕は再び孤独になり、黄昏色に染まる海を見ながら、サトミの言葉の一つ一つを噛み締めていた。確かに僕らは、お互いに宿命的な想いを抱いていたし、非日常的な世界に自分自身を求めようとしていたが、僕がサトミとの関係の中から非日常を見出したのに対して、おそらくサトミは僕との関係の中から日常を見出してしまったのだ。サトミにとっても僕にとっても、宿命への安住よりも非日常性の追求が大切なのは疑いようがなかった。何故なら、それこそが自分自身の根源であり、最も人間らしく躍動感のある人生を送るための具体的な手段だったからだ。だから、サトミが僕の中に日常しか見出せないのだとしたら、それは仕方のないことだった。でも、少なくとも僕はサトミを求めていたし、僕自身の中にある非日常性を理解してほしかったのだ。たとえ表面的には、日常性の象徴のようなしがたない会社員であったとしても。

エピローグ

一体どれだけの時が流れたのか、どこをどう歩いたのかわからなかったが、気がつくと、僕は死の海を離れて、荒野の中を一直線に突き抜けるアスファルトの路上を歩いていて、既に太陽はその姿を別世界へと隠し、頭上には今にもこぼれ落ちそうな星たちが至る所で戯れていた。そして月は、星の子供たちを優しく見守る母親のように大らかだった。僕は、その幻想的な光景と一体になるために道路の中央に仰向けに横たわり、夢幻のような世界と自分自身との関係を考えてみた。そう、全ての原因は僕の持つ強固なまでの日常性にあったのだ。僕は日常からの脱却を夢見ながら、実は誰よりも日常に身を埋もらせ、それを潜在的には望んですらいったのだ。そして、自分を根本的に変えることなく、サトミという他の存在を利用しようとしていたのだ。結局のところ僕自身は何も変わっておらず、また変わろうとも思っていなかったのだ。だから今こそ、僕は自分の力で日常からの脱却を図らなければならなかった。もちろん、それでサトミが帰ってくるわけではないが、何よりも僕は自分自身のためにそうしなければならぬのだ。では、手始めに何をするか……。それは自分でもよくわかっていた。僕は今、無限に広がる荒野に輝く星たちを見ながら、そして頭の中で、デニス・デ・ヤングの「デザート・ムーン」を奏でながら、全身全霊を使って叫んでいた。

今こそ、この想いを文章にしよう。それこそが、僕が自分らしく生きるための最良の手段だと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4693c/>

The Wilds Star

2010年10月8日15時59分発行